

バンコク日本人学校における現地理解教育

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校） 教諭
神奈川県横浜市立市沢小学校 教諭 嶋野 遥

キーワード：教育事情、生活習慣、文化、シーカー・アジア財団シャンティボランティア会

1. はじめに

縁あって赴任したタイという国の歴史や文化をまずは自分がよく知りたい、学びたいという思いが強く、時間があれば街へ繰り出した。その中で感じた日本とは違う生活習慣や文化、そしてシーカー・アジア財団の存在。知れば知るほど、調べれば調べるだけ新たな出会いや発見があった。また、私自身がたくさんの見聞を広めることにより、バンコク日本人学校に通う子どもたちが、更にタイに興味をもち、今後タイと日本との架け橋になってほしいという願いもあったため、現地理解に努めた。

2. シーカー・アジア財団シャンティボランティア会

(1) 財団との出会い、きっかけ

私が住むエカマイという場所のすぐ近くにスラムがあることはバンコクに赴任した頃から知っていた。しかし、以前から関心はあったものの自分では何も行動することができず、「スラム」という言葉からイメージするもののみで考えていたように思う。貧困、不衛生、麻薬など私が想像することは言葉上だけのものだった。タイに住んでいるのに、何も知らないことが情けなくなり、恥ずかしくもなった。家からわずか2kmにあるスラムがどのような原因で生まれ、今、どのような現状なのか、自分の目で見たいと強く思うようになった。そんなとき、同僚の紹介で「シーカー・アジア財団」のクロントイでの取り組みを知った。後日、クロントイにある財団の事務所を訪れることができることになったのだ。

(2) 財団の歴史

シャンティ国際ボランティア会は、1981年にタイ国内のカンボジア難民キャンプでの支援活動を開始して以来、40年近くに渡ってアジアの子どもたちへの教育支援や緊急救援活動を行ってきた団体である。1991年に現地法人シーカー・アジア財団を設立して以来、タイのスラムや農村、少数民族や移民労働者など、弱い立場に置かれた人々に寄り添ってきたようだ。なかでも、子どもたちや青年たちの生活の質の向上を目指して教育支援を行っている。

(3) 財団によるクロントイスラムでの新たな取り組み

政府や非政府組織の支援や住民達の結束により、少しずつ改善されつつあるクロントイスラムだが、現在でもスラムが抱える問題は山積みである。生活環境面はもちろん、教育面でも課題は山積みだそう。小学校への就学率が98%となったものの、家庭問題や本人の学習意欲が無い為に途中で退学する場合も多くある。現在はおおよそ20%の子どもが小学校を中途退学している。また青少年における性行為の乱れや喫煙・飲酒なども問題となっているようだ。

「シーカー・アジア財団」は、様々な教育支援をしている。中でも大きな事業として取り組んでいる2つのことを紹介したい。

①クロントイ発のオリジナルブランド ～日本人のデザイナーが協力FEEMUE KLONG TOEY～

1つは、クロントイ発のオリジナルブランドの作成である。日本人デザイナーの協力でバックやアクセサリーを商品化し、手工芸品作りを長く担ってきたスラムの女性たちの力を存分に発揮できる機会をつくったの

だ。FEEMUEとはタイ語で「腕前」という意味。商品を通して、スラムの女性たちの技術の高さを知ってもらい、イメージをよくしていこうという願いが込められているようだ。昨年、グッドデザイン賞を受賞し、受賞を契機に、日本やタイ、諸外国での認知向上に務め、クロントイスラムのイメージの改善を目指している。

②「未来ブラリー」「移動図書館」が与える夢

2つめは、図書館の設立である。学校が終わると、子どもたちはこの図書館に来るそうだ。本を読んだり絵を描いたり、自分の家では暗くてできないことがここでならのできるからと話していた。「未来ブラリー」に名前が変わったのは2014年のこと。この図書館の元をたどると1989年にまでさかのぼるそう。当時のボランティア団体がクロントイのコミュニティー図書館として建てたのが始まりである。毎日開館するこの未来ブラリーでは、財団の職員はもちろん、近隣の大学生が常にボランティアとして子どもと一緒に遊んでいる。

タイの外交官、オラタイさんはクロントイスラムの出身だ。7歳の頃からこの図書館に通い、ほとんどの本を読破。母親の商売を手伝うかわら、読書と勉学に励んだそう。奨学金を経て高校へ進学後、タイ最難関の大学に合格。政府留学生に選ばれてロシアに渡り、帰国後外交官になった。今は、タイの社会に恩返しをしたいと話している。

図書館には日本の絵本が数えきれないほどあった。中を開いてみると、日本語の下にはタイ語に翻訳された紙が貼ってあった。これらはすべて、財団の人たちやボランティアで行うそうだ。折り紙やもの作りの本が多かったのも印象に残っている。



3. タイのスラムの現状

現在、タイ国内には2,000箇所以上のスラムがあるとされている。その多くがバンコクとその周辺に集まっていて、タイ人口の10%が住むバンコクだけでも1,800箇所のスラムが存在する。バンコク人口の37%がスラムに住んでいるのだ。

(1) クロントイスラム

クロントイスラムは約10万人が住む、バンコク最大のスラムであり、1960年頃、バンコクの玄関港であったクロントイ港へ仕事を求めて多くの人々が集まり、スラムを形成していったそうだ。クロントイスラムのある場所は元々河口洲の湿地帯で、塩分を多く含んだ土地は農作物を育てることも出来ず、人はほとんど住んでいなかった。そこに地方からやってきた人々は廃材を使って家を建てた。雨期になって降水量が増えると床下の汚水は家の中まで浸水するといった状況で、衛生状態はひどいものだった。また次第に増えて行った家々は密接して建てられ、子どもたちが遊べるような広場も無ければ学校もなかった。こうした中、1968年ウンソンタム家のブラコン（現在は改名しミンボン）、プラティープ姉妹がスラムの子ども達の教育のために「1日1パーツ学校」と呼ばれる私塾を開いた。これがスラムにおける社会開発の発端となったそうだ。そして現在は住民達が結束し、政府にも直接意見を言えるようになったことで、様々な改善がされてきた。家々の間の路地はコンクリートで埋められ、水道や電気などのライフラインも整備された。また、ウンソンタム姉妹が始めた「1日1パーツ学校」はバンコク都に移管され、スラムの中の立派な小中学校となった。また、国内外のNGOの働きにより地域の発展、教育レベルの向上、麻薬・HIV/AIDS感染の予防など様々な取り組みが盛んに行われている。シーカー・アジア財団もその1つだ。

(2) テープラクサースラム

テープラクサースラムは、バンコクのゴミ処理場の周りがある。約160世帯が住むスラムである。タクシーで

近付くと、鼻をつくようなゴミの臭いがした。ここに人が住んでいるのだ。スラムに着く前に、自分が暮らす場所との違いに驚きを隠せなかった。

ここには、国営のゴミ処理場とは別に、ゴミを分別する工場が20あり、スラムで暮らす人々は、この工場で廃棄物分別の仕事をしていた。工場の所有者はタイ人、労働者は全員ミャンマー人だった。出稼ぎでタイへ来た人々だ。そして、ここでの生活は、目を瞑りたくなるくらい悲惨な光景だった。タイ人が暮らすクロントイスラムとは比べられないほどで衝撃を受けた。



テープラクサースラムには、教育を受けられないミャンマー人の子どもが多くいる。その子たちがタイの教育に参加できない理由は様々だ。例えば、ミャンマーの子どもたちは菌をもっていると噂され、他の子に広がるからと差別され、受け入れられないこともあるそう。また、不法入国やタイ語の無知も要因のうちになるそう。更には、ゴミ捨て場の中にあるスラムということもあり、不衛生な住環境、臭いも大変きつく、1日に少なくとも100回以上を通過するゴミ収集車の排気ガスも深刻な問題だ。その結果、スラムに足を運ぶ人がいない。スラムの子どもたちは他の普通の子どもたちのように様々な経験をすることができないのだ。

シーカー・アジア財団は、スラムの子どもたちに少しでも幸せをもたらすことができるように活動している。そこで、2019年1月12日土曜日にChildren's Day For All 2019 "No One Will Be Left Behind" のテーマで「子どもの日」の活動が行われた。このイベントでは大使館や日本人会からの支援により、参加した子どもたちにプレゼントをあげたり、一緒にゲームをしたり、楽しい時間になるようにと様々な活動を取り入れていた。私たち日本人のボランティアは、折り紙、蛇凧作り、植木鉢作りを手伝った。植木鉢は、ゴミであふれるスラムに少しでも緑をと緑化活動の一環としてつくっていた。

4. 日本からタイへのJICAボランティア

「シーカー・アジア財団」の活動に参加したり、調べたりするうちに、JICAボランティアの存在が目にとまるようになった。以下の数字は日本からタイへのJICAボランティア活動実績である。

種別	派遣中	累積数
青年海外協力隊 (JOCV)	33名	738名
シニア海外ボランティア (SV)	5名	329名
合計	38名	1,067名

JICA 公式ホームページより引用 (2019年1月4日現在)

財団の手伝いで訪れた聾学校でも JICA の存在を知った。聴覚に障害をもつ幼稚園から高校生までが通う学校で全員で200名程。聴覚障害だけでなく、知的障害を合併している子どもも多くいた。生まれたときから「音」を全く知らない子。少しは聞こえるけれど、お金がなくて補聴器が買えない子。耳に障害があると分かり親から捨てられた子。話を聞くたびに心がずきずきした。学校内では、みんな手話で会話をしていた。でも一歩外の世界

へ出ると、字の読み書きもできず、自分のお母さんともコミュニケーションがとれない子どももいるということだった。そんな現状を少しでもよくするために、私が訪問する1年前まで、青年海外協力隊の活動で佐野さんという女性の方が、補聴器の導入や手話以外のコミュニケーション手段（口の動きを読む、筆談）を増やせるようにしたそうだ。身近なところにこのような活動をしている日本人がいたことを知ったとともに、私にも何かできることはないか、そう強く感じた時間だった。まずは知ること。知る努力をすること。そしてそれを人に伝えること。できることから始めていきたい。上手に話せないからこそ、目を見て、自分の思いを一生懸命に伝えようとする子どもたちがそこにはいた。

JICAはこの他にも、女性の保護施設（人身取引・売春被害者・家庭内暴力・素行不良など）での活動がある。入所者の大部分は10代前半の子ども達であり、ここでの職業訓練などを通して、卒業後の社会復帰を目指す保護施設である。初めの数ヶ月間を過ごす「初期入所室」での日課をJICAの隊員が考える。情緒の安定・回復、自己効力感の向上をはかり、子どもたちの精神的成長に日々貢献している。

更には、高齢化対策も行っている。事故や病気で障害を負ってしまった人に対してリハビリテーションを行い、身体機能の回復と日常生活への復帰を支援する理学療法士と作業療法士。タイでは現在十数名のボランティアが高齢者施設や病院で活動している。

5. おわりに

タイで過ごしたこの3年間は、新しい出会いや発見の連続だった。これまでの人生の中で最も学びある時間になったように思う。異国の土地で生活するということが初めてだった私にとって、毎日が「挑戦」。正直初めは不安に思うことの方が大きかったが、タイに住む人に出会い、タイのことを知っていくうちに、どんどんこの国が好きになっていった。気付けば、もっと知りたい、学びたいと思うようになり、いろいろな場所へ足を運んでいる自分がいた。

調査・研究のテーマに挙げたことは、「タイの教育事情・生活習慣・文化について」だ。キーワードにも挙げている「シーカー・アジア財団シャンティボランティア会」の活動に携わったことは、私のタイでの生活の中で最も自分に影響を与えた時間となった。パヤオ県の学生寮に泊まり込みで訪問したこと、モン族が暮らすクンガクラン村・サントイスック村に招待してもらったこと、きっかけはここからだった。そこから、長期休暇や休日を利用して、シーカー・アジア財団の活動に参加したり、バンコク内にあるスラムのまちに足を運んだりした。このボランティア団体は東京にもある。日本に帰ったら、必ず訪れ、日本にいてもできることを自分なりに探せたらと思う。タイという国を通して知った世界の現状をこれからも調べ続け、少しでも良いから関わりをもち続けていきたいと強く思う。

最後に、3年間の赴任を終えて今思うこと、それは、少なからず来タイする前より、外国のことに興味をもち、日本とは違う環境で学ぶ子どもたち、その背景にいる大人の姿を見て、考え方や価値観が変わった自分がいるということ。今後、日本に帰ったときに、自分に何ができるのか、どう伝えることが良いのか、まだ明確なビジョンをもつことはできていないが、自分が目で見たと、肌で感じたことを決して忘れず、少しでも多くの人に伝えたい。